

オボー民俗の景観的変容

ー 2011年オトク地域における調査事例を中心に ー

白 莉莉[※]

一 問題の提起

オボーとは、モンゴル人が山や峠に石や土を積み上げた構造物であり、モンゴル人はこれに天神地祇が降りて宿るとし（オボー自身を地祇とみる考えもある）、毎夏オボー祭りをを行い、牛馬羊などの生畜またはその肉、乳製品その他を供え、五畜などの豊饒、息災その他を祈り、オボーのまわりをめぐり、かつ競馬、相撲、弓射を奉納する。またオボーが位置する場所的な特徴から、草原において歴史的に道標や境界標の機能も果たしてきた。オボーの呼称は、モンゴル語の読み方に基づいて表現すると「obao」であるが、漢文の文献に「鄂博」「敖包」という漢字で表記されているため、その漢字の音読みで一部の日本語の文献で「オボ」という表記も見られる。オボーは複数並べられることもあり、その中で最も多いのは、十三オボーである。

近年内モンゴルにおいて、経済的な発展に伴う伝統文化の変化は顕著であり、特に政府の主導で行われているチベット仏教の寺院とオボーなど伝統的な宗教領域の施設等の修築や再建があげられる。現在のオボーは果たして従来の定義で解釈しうるものであるのか。本稿では、景観的にオボーの「外」的变化の民俗について考察し、その

「内的」文化の意味合いを考え直したい。

二 調査地の概況

オトク地域は、地理的に内モンゴルのオルドス高原の西部に位置し〔図1〕、年平均気温は6.4℃であり、年平均降水量は270mmである北温帯乾燥と半乾燥草原気候の地域である。人口は約20万人であり、土地面積は約3.3万km²で、その中で天然牧草地が約80%を占め、内モンゴルにおいては典型的な牧畜業を主業としている地域である。この地域は、1980年に行政的に「オトク旗」と「オトク前旗」と2つの旗に分けられた。

近年、オトク地域では石炭や天然ガスなどの豊富な地下資源の乱開発が進められており、2005年からオトク旗の牧民ウランバガナの牧場内に中国石油長慶支社により「シユルヘイ天然ガス田」が開発され、オルドスの各地の天然ガス開発の進度を推し進め

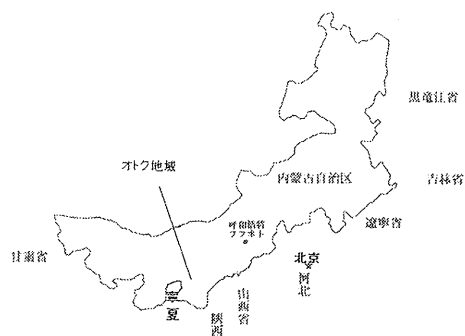


図1 オトクの位置

※神奈川大学歴史民俗資料科学研究科博士課程

た。それに伴い、「シュルヘイ天然ガス田」の近くにアジアNO. 2の天然ガス処理工場が建てられた。地下資源の開発により、オトク地方では隅々まで人工の舗装道が通るようになり、交通機関は急速に発展している。このような格段な社会変化が進んでいる地域において、各分野の社会学研究者たちもこの地域の伝統文化の動向に関心を引きよせている。

オトク地域において、放牧を主業とする牧畜地域は、行政的に村落を基本単位にしているが、昔の遊牧社会の名残として、現在も世帯同士の間に何キロも離れて暮らしている。したがって、各世帯の住処の位置は、基本的に特徴のある山や川、またはオボーの場所を基準に認識されている。

2011年度の調査の主要目的は、近年再修築されたオボーの景観的な特徴を考察することであり、前年度に取材したオトク前旗のモガイト・ガチャ村落のイケ・ツァイダム・オボーの周辺に分布するオボーを中心に調査することにした。調査対象のオボーについて前もって詳細に計画しておいたが、現地に着くと、雨などで本来柔らかい砂地の道路は、さらにどろどろの状況で車などが通れないところも多かった。仕方なく移動する際に、現地の協力者にお任せという状況で、舗装道路が通っているところに車を借りて、田舎道はバイクで移動することとなった。オトク地域の牧地区は、人口密度が平均2.3人/km²であり、隣近所との距離でさえ徒歩で測れないものである。またオボーとは本来標高1400m～1600mの山や丘の上に置かれ、大体半日で一基のオボーを回る進度だった。主な行動範囲はオトク旗と

オトク前旗が隣接している周辺の地域だった〔図2〕。

今回の調査は現地で主にモガイト・ガチャのイケ・ツァイダム・オボーの主宰者のノルブ氏（70代）、バヤン・チョット氏（50代）と同村のジゲドン氏（30代）の協力を得ることができた。兄弟関係を持つノルブ氏とバヤン・チョット氏について別紙でも触れたように、上の二世代からイケ・ツァイダム・オボーの日頃の管理とオボー祭祀の主宰を担当し、現在もオボーがバヤン・チョット氏の牧場に置かれている。

もう一人の協力者のジゲドン氏（30代）は、元々モガイト・ガチャの牧民であるが、「5年計画の禁牧政策」により、利用していた牧場は禁牧対象地となり、「家に住むことはできるが、家畜を飼うことはできない」と強制された。現在近くのマラトという小さな町に引っ越し、毎年国から生活の援助を貰う他、夏の時期に近くの道路舗装の工事地などで働き、暇な時は車に客を乗せて不安定な商売にたよりながら生活している。

「日本から来た記者」という名目を被され、現地の協力者たちの強い協力をいただきながら得られたデータを以下のようにまとめ

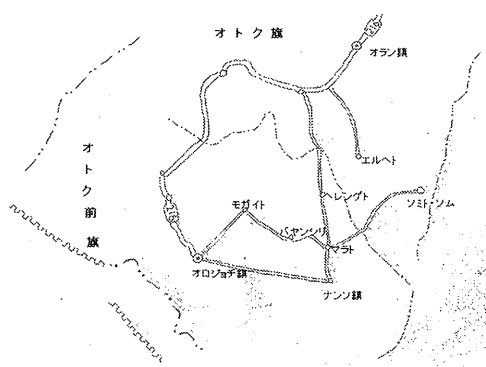


図2 調査地域

ておきたい。

三 オトクのオボー民俗

1 モガイト村と二基のオボー

2010年度の調査研究の継続としてモガイト村のイケ・ツアイダム・オボーと同村のフテリン・オボー [写真1] について検討してみたい。

モガイト村は行政的にオトク前旗のナンソ鎮に所属し、主に牧業を営んでいる村である。この村は現在128の世帯、550人の人口からなり、その内、モンゴル人の世帯は99戸で396人いる。村の面積は38万haで、一世帯は平均2000ha以上の牧場を所有する。20年前から各世帯の牧場が鉄線で囲まれるようになり、元々明確な境界線がなかったため、世帯同士の牧場の紛争問題が相次ぐ。1995年に政府から正式に計器を持って配分を行ったと言われている。現在も解決出来ていない牧場境界の問題が数多く存在している。

同村のノルブ氏（72歳）とジラントックトホ氏（68歳）は上の世代からこのモガイト村辺りに暮らしおり、二人とも子どもの時に地元の物知りに弟子入りして、一年ぐらいモンゴル語とチベット語を学んだという。要するに、地元では「文化のある人（知識を持っている人）」として知られてい

る。特にノルブ氏は、50年代に地元の学校で教員を務めた経歴を持ち、今も地元の雑誌等にモンゴル語の文章を載せたりして、文化人として活躍している。

二人の記憶によると、子どもの頃に、この地方では1世帯の牧場が大体2万～3万haであり、この周辺に10何の世帯しか暮らしていなかった。現地の人口の増加と、また50年代に“外”（地方のモンゴル人たちは、村に入植してきた漢人を“テメト”から来たと記憶しており、行政的に陝西省靖辺県辺りを指す）からの移住民が入植してきたことにより、現在128の世帯となっている。

フテリン・オボーは、モガイト・ガチャのフテリン湖の東にある高さ1344mの丘の上に置かれている [図3]。このオボーの由来について、地元では次のような伝説が伝わっている。

昔、チンギス・ハーンが西夏国（今の寧夏自治区辺り）を攻撃する目的で、モンゴル軍隊を率いて今のモガイト村辺りを通り過ぎる際に、フテリン湖の所に一服し、乗っていた馬に水をあげたりした。出発の際に地元の人に進行の道を案内してもらうことになった。案内者のことをモンゴル語で「フトチ」と言う。この地方出身の案内者がチンギス・ハーンの征服偉業に関わったこ

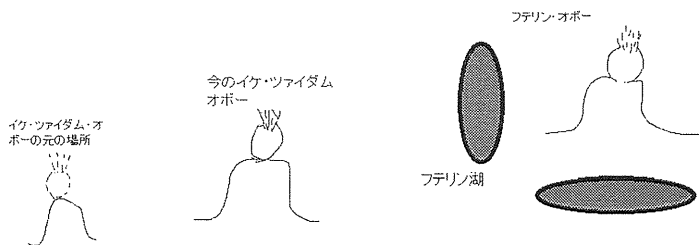


図3 モガイト村の二基のオボー

とを誇りに思い、それを記念するために、地方の人々は湖のことを「フテリン湖」と名付け、隣の丘の上にオボーを建てて「フテリン・オボー」と命名した。

フテリン・オボーは、毎年旧暦5月13日にオボー祭祀を行っている。現在オボーの主宰者のゾーン・ナムル氏（40代）が、フテリン湖の西側の畔に住んでおり、「父親が健在の時にオボーの主宰者だったので、現在自分が受け継いでいるのだ」と語っている。

イケ・ツァイダム・オボーの主宰者のジラン・トットホ氏は、子どもの頃にフテリン湖の東北の畔に住んでおり、当時は父親を始め一家がフテリン・オボーの祭祀に参加していたという。「イケ・ツァイダム・オボーの近くに移ってから、フテリン・オボー祭祀に近年余り参加できなくなった。何年前に、フテリン・オボーの主宰者の職を頼まれたが、二つのオボーの主宰を兼職することは大変だと思って断った」と語っている。

また、イケ・ツァイダム・オボーの主宰者のバヤン・チョット氏によると、彼らも昔フテリン・オボーの祭祀に参加していたという。「父親が健在の時に参加していたので、我々も父親が亡くなってからしばらくフテリン・オボーの祭祀に参加していた、最近あまり行かなくなったが」。また、文化大革命の後、早速イケ・ツァイダム・オボーの復活に取り掛かったバヤン・チョット氏の父親のラシニマ老人は、イケ・ツァイダム・オボーを復活させた後、ただちにフテリン・オボーの復活にも乗り出したと言われている。

別紙でも触れたように、現在イケ・ツァ

イダム・オボーは、ハサルゆかりの神霊祭祀と合併された後、その祭祀活動は地方において前より影響が高まり、参加者の規模も年々拡大され、地元の公的機関の関心を引きよせている。主宰者たちの管理により、オボー祭祀の施入などは怠りなく整理され、祭祀場の施設の改善なども積極的行われている。一方、フテリン・オボーの場合、オボー祭祀は毎年普通に行われ、祭祀当日の財施もその日の費用に適合させているようだが、イケ・ツァイダム・オボーの年輩の主宰者らから見ると、フテリン・オボー側の若層の主宰者たちが、オボーの布施をオボーと祭祀場の改善に投資しないまま無駄金に使っているなどと批判している。近年観光業を進めるための行政側の提唱もあり、地方における伝統文化の復活と文化施設の修築、改善の運動は、牧民たちの認識に影響している側面が窺える。

2 チバガント・オボーについて

チバガント・オボーはオトク前旗のマラト寺より南に6キロ離れている1409m高さの山の上にある。一基の大オボーと十二基の小オボーからなる十三オボーである [写真2]。

外見の特徴：①十二の小オボーの並び方：大オボーから少し斜めに南へ並ぶ。元の十三オボーの遺跡はまだはっきり見える。②小オボーの前に石碑が立ち、オトク地域の他の十二の旗オボー¹の名前がそれぞれ刻まれている。

このオボーについて以下のような伝説が語られている。昔、チバガント丘の麓に周囲に名の知られている「ボル」という官人が

住んでいた。この官人が自身の官職の進級と周囲のモノ充足を願い、このチバガントという丘の上にオボーを建て、「チバガント・オボー」と名付けた。

このオボーにもう一つの名称があり、「スウリデ・オボー」ともいう。スウリデとは、昔のモンゴル族の大ハーン（王様）の旗幟のことであり、長い歴史の間、モンゴル人はスウリデを軍神や守護神が宿る聖なるものとして信仰を持つようになった。このチバガント・オボーの西北に何キロ離れているところに、オトク地域のシンボリックな存在のスウリデの祭祀場があり、昔から一本の大きな斑のスウリデが祀られていた。

1868年に隣境の寧夏の回民族により、清王朝に対する「回民反乱」が起きた。当時、満州族の清王朝の支配を支えていた関係により、モンゴル族地域も反乱軍の攻撃対象となったのである。反乱軍は、真っ先にオトク地域のモンゴル人を攻撃し、大きな災難をもたらし、「モンゴルの武器を以てモンゴルを襲う」というスローガンを以て、スウリデを略奪に来たが、そのスウリデは不思議になくなっていった。反乱が治まった後、地方の人々がスウリデを捜し掛け、このチバガント・オボーの所で見つかったという。そのため、このチバガント・オボーのことを地方ではまた「スウリデ・オボー」と命名し、旗政府から祭祀の主宰を担当するようになったという。

オトク地域の人々は、スウリデに特別な祭祀儀礼を行うだけではなく、現在もモンゴル人の世帯は、住処の前に小さな祭壇を建て、上に二本の小さなスウリデを挿して、各世帯の吉祥たる日や何かの記念すべき日

などに、世帯主によりスウリデを祀ったりする。このスウリデを祀る儀礼をまた「チンギス・ハーンを祀っている」と答える人もいる〔写真3〕。

3 エルヘト・オボーとオナガン・ブリド湖

1 エルヘト・オボーとその伝説

エルヘト・オボーはオトク旗の政府所在地オラン鎮の南に聳える海拔1616m高いエルヘト山の上に立つ。地方の人々は、山の頂に「黒い馬に乗り、金色の弓に銀色の矢を付けて手にもつ神様が宿っている」と描き、「この神様はお酒を好むのだ」などと、オボーの神様を酒好きの武士のイメージで比喻している。

現在のエルヘト・オボーは、外見的特徴としては、①一基の大オボーと十二基の小オボーからなる十三オボーである。一基の大オボーは、セメントで作った高台に灌木を束ねて出来たものであり、12基の小オボーは、セメントで簡単に造った「仏塔」のような形をしたものである〔写真4、5〕。元のオボーの跡からも確認できるが、外見的に現在のオボーと甚だ異なるようで、記録によると、十二基の小オボーも灌木を束ねて出来たものだったという。②興味深いのは、元の十二基の小オボーは、大オボーの位置より北の方に並んでいたが、現在は大オボーの手前の方向に並んでいる。

近年、オボーの石の下やオボーに結んである儀礼用のハダク（絹）に現金を挟んだりする現象が見られる。エルヘト・オボーの場合も、大オボーの上に、現金を石で押えてあった現象を見かけた。また、このオボーは古くから、女性が近づいてはいけな

いという禁忌はあるが、筆者は研究者という特別な身分で、またオボーに訪れたのは祭祀の日ではなかったため、オボーに登ってみることが許された。一方で、このオボーは、現地協力者のバヤン・チョット氏が、遠い距離を気にせず、故郷の美しい山水をアピールしようとした誇りの気持ちで案内してくださったオボーである。

このオボー及び周辺の景色について地方では色々な伝説が伝わっている。

エルヘト山の麓の周囲は栄養豊かな植物が豊富に密生し、四季に渡って100万頭の家畜がその麓に散かっていた生き物豊かな高い山だった。ある日、突然北のほうから、八頭の白い獅子が来て、エルヘト山辺りの人間と家畜に巨大な災害をもたらした。すると、オボーの神々が黒い馬に乗り金色の弓矢を背負い、八頭の白い獅子を南に向かって追いかけ、今のウラン・ノール（赤湖）の東畔に一頭の獅子を射死した。殺された獅子の血が流れてウラン・ノール湖に入ったので、湖が赤色に変わり、そこからこの湖は「ウラン・ノール（赤い湖）」と呼ばれるようになった。殺された獅子の辺りに草

が生えなくなったため、獅子の遺骨の上にオボーを立て「ヤルジン・チャガン・オボー」²と名付けた。

エルヘト・オボーは、高いエルヘト山の上に立ち、自然の景色が絶好な場所に置かれ、オトク旗の王公にオトク旗の五番目の旗オボーとして位置付けられた。オボーの主宰者は旗の政府から派遣され、オボーの近くの地方政府からも祭祀の協力者と世話役などを派遣する。読経のラマ僧は、旗のエルヘト寺から毎年何人かのラマ僧を派遣することになっている。

II オボーとオナガン・ブリド湖

このエルヘト・オボーの山を降りて、西南の方に10何キロ離れている平原に、灌木が密生した場所があり、その奥に進んでいくと、この地方で有名な湖がある。「オナガン・ブリト」と言われる。「オナガ」とは、二歳の馬を言い、「ブリド」とは、オハシスを指す。地理的にオナガン・ブリド湖はほぼエルヘト・オボーとチバガント・オボーの斜め真ん中の位置にあり、エルヘト山とチバガント丘の間の盆地にできている [図

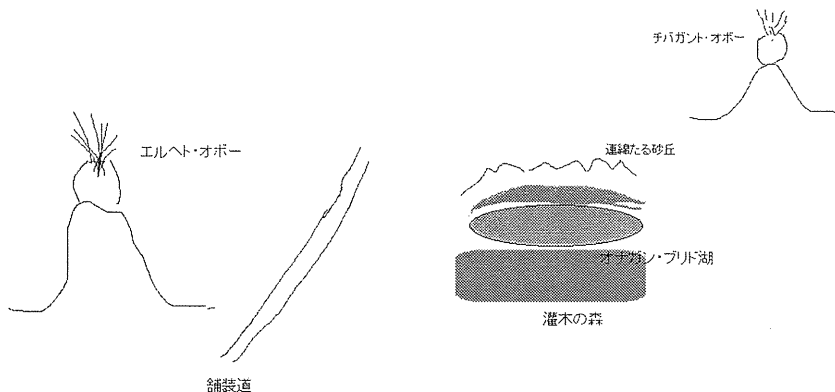


図4 エルヘト・オボー、オナガン・ブリド湖とチバガント・オボー

4]。

筆者が調査中に、エルヘト・オボーを降りて帰りの途中に、現地協力者のバヤン・チョット氏の熱心な案内でオナガン湖に立ち寄った〔写真6〕。灌木が密生した小さな林地を通り抜けると、目の前にまさしく大地に張り付けた一枚の鏡のような湖が見えた。遠い向い側に黄色い砂丘が繋がり、その手前の小規模な緑地に少量の家畜が草を食んでいた。近年草原の湖が見る見るうちに枯渇されてゆくことで、オナガン・ブリド湖は牧民たちの自然を懐かしむ存在でもある。葦が小規模な群落を作り、水面に鳥が漂っていた。「昔これよりずいぶん広がったよ、実際の深さが誰も知らない。何十年前にアメリカの二人の研究者が小舟で湖の奥まで入ろうとしたが、途中で進められなくなって戻ったよ」とバヤン・チョット氏が語る。

このオナガン・ブリドについて以下のような伝説がある。昔、今のオナガン・ブリト辺りにある年、一滴の雨も降らず、井戸が乾上り、植物が立ち枯れ、家畜が大量に死に、人々は恐ろしい自然災害に苦しんでいた。ある日、ハン・ホルモスタ天神から自分の七人の娘の中から、長女の雲仙女を下界に雨を降らすように差し遣わした。雲の仙女が今のオナガン・ブリドの上空を飛びすぎる際、うっかりして口の中に閉まっていた万世の水玉を下界に落としてしまった。この万世の水玉が転がり落ちたところに、きれいな湖ができ、雲の仙女が龍王の駿馬と変わり、この湖の畔に住むようになった。それでこの湖のことは『オナガン・ブリド（駿馬のオアシス）』と呼ばれるよう

になった（ソナム、アルピンバヤル2005、52p）。

バヤン・チョット氏によると、オナガン・ブリド湖のほとりに二頭の駿馬がおり、夜になると、その中の一頭はエルヘト・オボーが立つエルヘト山の麓まで餌を求めるが、もう一頭は反対側のチバガント・オボーが立つチバガント丘の麓まで水草を追かけ、日が昇る際に、またオナガン・ブリドの畔に戻ってくると話している。

したがって、エルヘト・オボーの祭祀儀礼は、現在もオナガン・ブリド湖の祭祀と関わって行われてきた。毎年、エルヘト・オボー祭祀を前もって、オボーの主宰者たちはオボーに読経するラマ僧たちを先にオナガン・ブリド湖の畔に招き、読経儀礼を行う。湖の祭祀儀礼を終えてから、オボーに登り、オボー祭祀の手まわしに入る。筆者が訪れた時に、オナガン・ブリド湖のところに、丸い草燃えの跡が残っていたが、「今年のオボー祭祀の際に行われた儀礼だろう」とバヤン・チョット氏が言う。すでに別紙で発表されているイケ・ツァイダム・オボーの場合、オボー祭祀の際に近くの間戸を祀る儀礼が行われるのと似たように、エルヘト・オボーの場合は、近くのオナガン・ブリド湖を祀る儀礼が行われるのである。

4 シュルヘイ・オボーとシュルヘイ寺

1 シュルヘイ・オボーの歴史と現在

シュルヘイ・オボーはオトク旗スミト・ソムのシュルヘイ村のシュルヘイ寺の後ろに立つ海拔1350mの高い丘の上に置かれている。外見的にみると、石で丸く固定された

本台が四角いコンクリート造りの0.8m高さの土台の上に設置され、本台の頂に灌木の束が挿されている [写真7]。

オボーの本体の四面にそれぞれ30cm×20cmの大きさの石碑が張り付けられ、正面の石碑の上にモンゴル語、チベット語、中国語でオボーの名称が刻まれ、その反対側の石碑に、モンゴル語と中国語の両文字を使った『シュルヘイ・オボー修築の功德碑』が縦書きで書かれている [図5]。この功德碑に、オボーの再修築に、オトク旗の党の書記〇〇さんと旗長の〇〇さんが個人のお金を寄付していることが明々と書かれている。

オボーの本台の右と左側に付けた石碑に、シュルヘイ・オボーに関する伝説がそれぞれモンゴル語と中国語で刻まれている。石碑の端に「オトク旗民族宗教協会より」と書かれている。

上記のオボーの現象と同じように、この

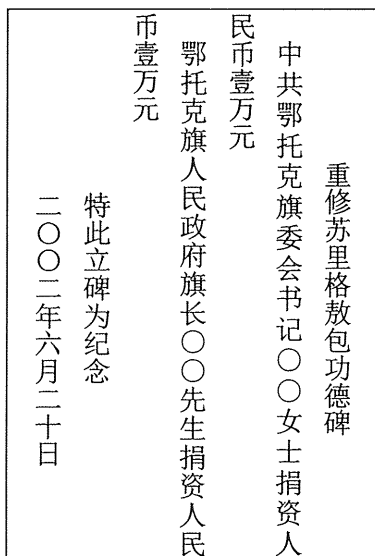


図5 シュルヘイ・オボーの功德碑

シュルヘイ・オボーより東南に300mぐらい離れている場所に元のシュルヘイ・オボーの跡ははっきり見えている。シュルヘイ・オボーは景観的にシュルヘイ寺が靠れる丘の上に立っている。建てなおされた際に、元のオボーの場所から移動されたのである。その理由は、景観的にお寺の主たる建物と一直線で見えるためだったと、主宰者のエンゲ・ジョリグ氏（40代）が語る。要するに、オボーの再修築の際に、一見するとお寺とオボーが整然として見える美観が求められたのである。

II シュルヘイ・オボーの主宰者への取材

今回の調査でシュルヘイ・オボーの西の麓に住んでいる主宰者のエンゲ・ジョリグ氏の家を訪れ、エンゲ氏をオボーのところに招き、シュルヘイ・オボーについて話を伺うことができた。

語り手：エンゲ・ジョリグ氏、40代

このオボーは昔からこの辺りの十数軒の世帯によって祭られてきた…（元のオボーの跡を指しながら）ここはオボーの元の場所である。父親が祭っていたオボーだった…この近くに『革命記念碑』もあった…今のオボーを建てなおす際に、塔児寺の生き仏を招き特別な儀礼を行い、今の場所に移した。普通のラマ僧にはできない。最初はこの周辺の12軒ぐらいの世帯によって簡単に祭りをを行い、付随行事（競馬やモンゴル相撲など伝統的な競技）などもなかった。現在はオボー祭祀の主宰活動に関わる世帯数も少し増えてきて、

17軒ぐらいになっている。祭祀に集まる人も多くなり、競馬とお相撲の競技も行われている。毎年60、70頭の競馬が集まるようになった。この辺りで相当影響が出ている。このような状態で祭祀は4、5年続けている。このお寺が修築されてから、オボー祭祀に参加する人も増えてきた。

シュルヘイ・オボーは現在お寺のオボーだと言われている。私が物心ついたときにお寺も破壊されたままで、オボーもなくなっていた。その場所に『革命記念碑』が立っていたが、後にこの辺に住んでいたナムタルという叔父さんがその『革命記念碑』を倒して、元のオボーを建てたと聞いた。現在、オボー祭祀に70人ぐらいのお相撲が集まり、『男の三技』が行われている。また祭祀の日に、ソムの政府から役人たちが来て、布施といいますか、現金1000元を持ってオボーに捧げたりする。オルドス歴の9月9日に始まるが、9日にシュルヘイ寺のチャム踊りの儀礼がおこなわれ、10日にオボー祭祀が行われる。祭祀の日に昔は三頭の丸煮を使っていたが(オボーに捧げる羊の丸煮のこと)、現在五つの丸煮を使っている。ラマ僧は20何人参加する。前は一人のラマ僧を招き祭っていたが、現在20何人のラマ僧が参加し、お寺のオボーだと言われているので、より大事にされている。

エンゲ氏によると、オボーの下にたくさんチベット語の経典が埋められ、新しいオボーが建て直された祭に、生き仏の読経

などの儀礼により移動して新オボーの下に埋め直したという。元のオボーが、単なる灌木を束ねて簡単にできたものだったという。現在オボーの主宰者に十数軒の世帯が入っており、その中で一軒の漢人世帯があり、祭祀の準備活動は、各世帯が順番に担当する。シュルヘイ・オボーの丘に立ちながら、遠方の高い山と丘の方向を指し、エンゲ氏とジゲデン氏は、口にオンゴン・オボー、チャガン・オボー、ボルハン・オボー、サイハン・オボーなど遠くの山や丘に置かれているオボーの方向を確認している。オボーは彼らにとって、この土地に対する認識の基準でもある。

主宰者のエンゲ氏は、現在シュルヘイ・オボーのほかに、東の方に十数キロ離れたところにあるもう一つのオボー祭祀に参加しているという。メデルのオボーといい、彼の父親が昔祭っていたオボーであり、後にシュルヘイ・オボーの近くに移り、主にシュルヘイ・オボーを祀るようになったが、現在も毎年メデルのオボー祭祀に参加しているという。

また、この二つのオボー祭祀のほかに、エンゲ氏はまたこの地方で最も規模の大きいサイハン・オボーと名乗るオボー祭祀に参加している。「オトク地域を代表する十三の大オボーの一つであるため、毎年サイハン・オボー祭祀に参加している」と言うが、筆者が調べたところ、オトク地域の十三の大オボーのリストに、このサイハン・オボーが含まれていない。ただ、サイハン・オボーは、エンゲ氏が祀っているシュルヘイ・オボーとメデル・オボーと比較すると、主宰者だけで50数軒の世帯を中心に

行われているとのことで、地方で相当規模の大きいオボー祭祀であることが推測される（オトク・オボー、2005年）。要するに、エンゲ氏は現在、①主に住処の近くにあるシュルヘイ・オボーを祀り、オボー祭祀の主宰者のメンバーである；②また、父親が昔祭っていたメデル・オボーのオボー祭祀に参加している；③また地方で最も規模の大きいサイハン・オボー祭祀にも参加している。

III シュルヘイ・オボーの伝説

現在シュルヘイ・オボーについて以下のような伝説が伝わっている。

昔、チンギス・ハーンは西夏国を攻撃する目的で、モンゴル軍隊を率い六盤山³に向かって進軍する途中で、シュルヘイ・オボーが置かれている丘の上にモンゴル軍旗の黒いスウリデを祀った。スウリデを祀る儀礼をおこない、モンゴル軍隊の意志を固め、闘志を燃やすのであった。当時、チンギス・ハーンは命令を下し、九×九＝八十一⁴頭の羊の丸煮を供物として用意し、黒いスウリデを祀り、西夏国を征服しないと絶対撤兵しないと軍旗のスウリデに誓約した。祭祀儀式が終えた後、兵士たちに祭祀の供物を配分しているうち、丸煮の供物の中に生の肉が一玉現れた。これを見て、チンギス・ハーンがその生の供物を天から下った特別な恩恵であると言い、この丘の頂に捧げたという。生の肉をモンゴル語で「シュルヘイ」と表現するため、後に人々は記念するために丘の上にオボーを建てて「シュルヘイ・オボー」と名付けたのである。

この伝説は、主宰者のエンゲ氏と現地協

力者のジゲデン氏が、シュルヘイ・オボーのところで筆者に語ってくださった。『オトク・オボー』にもほぼ同じ内容が記載されている。また、オボーの側面に貼り付けられた石碑にも書かれており、歴史年代などを比較的明確に記述している。

歴史的に、チンギス・ハーンは西夏国を征服するために、前後六回をわたって攻撃を行ったが、オボーの石碑に記載されている年代によると、シュルヘイ・オボーの辺りを通ったのは、六回目の攻撃であったという。つまり、1227年に、チンギス・ハーンのモンゴル軍隊は、シュルヘイ・オボーの近くで西夏の軍隊と勝負する決断がなされ、この丘の上で軍旗の黒いスウリデを祭ったのである。

IV シュルヘイン寺

モンゴルにおけるオボーとチベット仏教との関わりは、歴史が長く且つ複雑な問題である。景観的に見ると、チベット仏教のお寺の隣接地にオボーを建てることもあるが、お寺とオボーが離れている現象も多い。シュルヘイ・オボーの場合、オボーが立つ丘に靠れた形でシュルヘイン・ソムお寺が建設された。

このお寺は1907年に建てられたという。2001年からオトク旗政府は地域の宗教活動の場所として、また観光ツーリズムのニーズに応え、今のシュルヘイン寺を修築し始めた。2005年に今のシュルヘイ村の近くで規模の大きいシュルヘイ天然ガス田が中国石油長慶支社により開発され、同時に天然ガスの処理工場なども作られ、内モンゴル自治区の大都市と自治区外の大都市に天然ガス

を提供している。当該会社はシュルヘイン寺の修築にも援助しており、その貢献をお寺の入り口の両側に建てた記念碑に記述している。近年、お寺やオボーなど再修築された宗教施設において、記念碑が作られるようになり、修築の際に支持と援助を提供した地方政府、公的機関、地方の企業などの功績を明記している。

また、シュルヘイン寺の場合、13世紀にチンギス・ハーンのモンゴル軍隊がこの地方を横切ったという歴史出来事を記念するために、現在お寺の敷地の真ん中に武具を手を持ち馬に乗っているチンギス・ハーンの銅像が建てられている [写真8]。

5 ジュルヒン・スム・オボー

ジュルヒン・スム・オボーは、現在エルヘト・ソムの中心に聳えている海拔1382mの山の上に置かれている。地方の人々は山のことを人間の「ジュルヘ(心臓)」と喩え、山の頂と麓に位置するオボーとお寺のことをそれぞれ「ジュルヒン・スム・オボー」と「ジュルヒン・スム」と名付けた。

ジュルヒン・スム・オボーは外見的にみると、本体がタワー式の三層で造られ、石で丸く造られた土台の上に置かれている。本体の頂に生木の束が挿されている。オボーの本体の正面に40cm×20cmの大きさの記念碑が貼り付けられ、その上にモンゴル語、チベット語と中国語でオボーの名称を表示している。記念碑の右端に「二〇〇八年五月二八日」とオボーが修築された年月日を明示している。オボーの手前に一本の榆の木があり、木の上にも数多くの青色のハダクが結び付けられている [写真9]。モンゴ

ルの地方では、昔から榆の木、特に寿命が長く、外見的に特徴のある榆の木に特別な感情を持ち、神様がついているとみて祀るところもおおい。オトク地域では、この習慣は現在も継承されている。

モガイト村のイケ・ツァイダム・オボーの主宰者ノルブ氏の牧場に、一本の年老いた榆の木がある。今年ノルブ氏の実家を再び訪ねた際に、その榆の木の枝と木の幹に大量なハダクが結ばれ、宗教儀礼用の幡などもたくさん掛けられていた。ノルブ氏の長男のビリゲト(40代)は、ある日この榆の木に仏様の霊が憑いたという不思議な夢を見、その翌日から早速人々を集め、仏様が憑いている聖なる木とみて正式に祀ったという [写真10]。

ジュルヒン・スム・オボーの場合、景観的にオボーと榆の木は同じ土台に立ち、透き通った青空の下にユニークな景勝を形成しているが、オボー祭祀の際に、榆の木をどのように扱っているかは確認されていない。この榆の木についての話は、『オトクのオボー』にも言及されていない。

ジュルヒン・スム・オボーについて、伝説も見当たらないし、オボーのところにも書かれていなかった。山を下ってきたところにあるジュルヒン・スムお寺は、一軒の単純なレンガハウスからなる建物であり、その入り口の上に扁額が付いており、上に「文明宗教活動場所」、「オトク旗民族宗教事務委員会」、「一九九七年五月一日」と書かれている。お寺の隣にラマ僧の宿舎と思われる何軒ものレンガ造りの住処がつながるが、現在だれも住んでおらず静かだった。

6 チャガン・デゲキン・オボー

チャガン・デゲキン・オボーは、現在オトク前旗のモガイト・ソムのバヤン・シリ村の海拔1423mの高い丘の上に置かれている。近年、地元の文化建設により、新しく造られたオボーは、コンクリート製の土台の上に生木が挿されている [写真11]。オボーの左側に170cm×170cmの大きさの記念碑があり、上にオボーの歴史と伝説が書かれている。この記念碑は2005年に、当時まだ日本に留学していたホビスガルト氏により建てられたという。ホビスガルト氏の上の世代からこのチャガン・デゲキン・オボーを祀り、現在も兄弟を含み一族がオボーの主宰者グループに入り、毎年オボー祭祀に参与している (ナランビリグ2011)。

このオボーの由来について、昔はこの土地でゴムボ・ダムサルという金持ちが住んでいた。ある日、ゴムボ・ダムサルは現在のチャガン・デゲキン・オボーが立つ丘に登りタバコを吸いながら家畜を飼っていたが、思わず大事な喫煙具のパイプをなくした。何度も何度も探したが見付からなかったため、パイプを落とした辺りに石を積んで印をつけておいた。その後、ゴムボ・ダムサルは丘の上にパイプを探しにくるたびに石を積みあげていった。日々が経ち、積んだ石積みもだんだん大きくなり、落としたパイプも偶然見つかったという。喫煙具のパイプは、モンゴル語で「デゲク」と言い、ゴムボ・ダムサルの喫煙パイプはシルバーの色だったため、この丘は後に「チャガン・デゲキン丘」、つまり「白いパイプの丘」と呼ばれるようになった。

積み上げてできた石積みは、チャガン・

デゲキン・オボーとして祭祀が始まったのは、1890年代のことで、当時隣のマラト出身の一人のタイジとモガイト出身の人々が力を合わせて、元の石積みを改造し、上に生木の束を挿してオボーとして修築し正式な祭祀を始まったという。文化大革命を経て再復興されたのは、1981年のことだった。『オトクのオボー』の記載に載っているチャガン・デゲキン・オボーは、1981年に復活された後のオボーだと思われるが、外見的に土盛りを土台にしたたくさんの生木の束が挿されたオボーであると書かれている。現在のオボーは、近年現代風に再修築されたものであり、土台はコンクリート製の造営物となっている。今のオボー祭祀の主宰者たちは、みんな父親の一代から継承した人たちである。

1990年代にチャガン・デゲキン・オボーが置かれているバヤン・シリガチャの人民委員会は、上層の各行政側の支持を求め、チャガン・デゲキン・オボーを祀っている牧民たちを呼びかけ、オボーの周辺に松の木の苗を植え、環境の緑化を改善することに努めた。また、オボーに捧げられた布施を集め、オボーの祭祀場で二つのコンクリート製のテントを建て、祭祀場の設備を改善している。

7 フレー旗のフンデイン・オボー

近年、各地における伝統文化の復活の影響で、内モンゴル東部の一部の農耕地域においても、オボー祭祀が復活されている。筆者が今年の調査の最後に、内モンゴルの通遼市のフレー旗のフンデインという農耕村落において、地方の小学校で30年教便を取

ったバヤントラ氏（60代）の協力を得て、今年復活されたばかりのフンデイン・オボーを考察することができた。

このフンデイン・オボーは、フンデイ・ガチャの東に聳える海拔1000m高い丘の上に置かれたオボーであり、本体は石材ででき、本体の頂上に松の枝が挿されていた。農耕村落のオボーの印として、松の枝の隙間にたくさんの緑のトウモロコシの芽が生えていた [写真12]。近年環境緑化の提唱により、フンデイン・オボーが置かれている丘を下ったところの斜面地は若い松の木々に覆われている。麓の平地に農作物の畑が広がっている。

バヤントラ氏によると、このフンデイン・オボーは、180年間地方の人々により祭られてきた歴史を持つが、1950年代の土地改革の時期に中止され、半世紀の休息を経て、今年からようやく復活されたという。「前はこの近くに元のオボーの跡もあった。植物に覆われた土盛りの跡があった。祭祀が中止された後、牛飼いの人以外誰もこの丘に来なくなったからね」とバヤントラ氏が語る。

現在のオボーを建てる際に、石材は全部遠くの山からフォークリフトで運んできたもので、大変な工事だったという。費用の多くは旗政府、ソムの政府が負担し、そのほかフンデイ・ガチャの村民たち全員が布施して作り上げたものである。フンデイ・ガチャは現在約300戸の世帯からなり、三つの組と分けられ、村民全員がモンゴル族の村である。村民の中で、村の出身であるが、現在都会に住んでいるゲンデンという90歳のお爺さんが、オボーの復活に最も関心を

寄せ支持を与えたと村人に語られている。

2011年に半世紀ぶりのオボー祭祀が行われることとなり、地方では早くから祭祀に備えて準備していた。しかし、2011年の春に、内モンゴルのシリングロ盟である牧民が牧場に勝手に入った石炭を運んでいた車に弾かれて死亡した事件が起き、内モンゴルの各地で「草原を守り、牧民を守る」学生デモが起きたりした。したがって、各地方政府からモンゴル人が集まることを厳しく警戒するようになったため、本来の仕来りで旧暦5月13日に祭祀を行われる予定のフンデイ・オボー祭祀は、事件の影響で中止されることを恐れて、予定日より早めに祭祀を済ませたという。オボー祭祀に、競馬やお相撲などの伝統的競技も行われなかったが、フレイ旗の有名な伝統的な民族舞踊であるアンダイ舞踊の披露が行われたという。比較的単純な祭祀活動であったようだが、通遼市やフレイ鎮に住んでいるモンゴル人たちも、たくさん集まってきたことを地元の人々はうれしげに語っていた。

まとめ

1950年代から中国国内の一連の政治運動と政策により、オボーの祭祀活動は強制的に中止されることとなったが、1980年代の始めから公式に復活されてきた。近年、中国の各地において政府や公的機関は伝統文化の復活と文化施設の改善などに積極的に取り組んでいる。したがって、1980年からすでに民間の手によって作られたオボーは、また政府の主導で再建されることとなり、本来は自然の石と灌木、土などで作られていたオボーは、現代建築用の材料が用いられた

現代化された造営物と変容した。

本稿では、主にオトク地域において近年公的機関の主導や支持の元で、再建されたオボーの景観的な特徴を考察し、結論として次のようにまとめておきたい。①オボーの場所を移動してはいけないという古くのしきたりはあるが、再建の際に、元の場所から移動された現象が多くみられる。その動機として、祭祀領域全体の景色の美観が求められていることが窺える；②再建されたオボーの聖なる祭祀領域において、この地域に古くから存在していた他の信仰習俗との合併がよく見られる。英雄の神霊の祀りや楡の木に対する信仰、または井戸や湖の祀りなどは、施設的にオボーと同じ場所に作られているものもあれば、祭祀の際に連携しておこなう場合も多くなっている；昔のオボーの上に、家畜の骨や毛、また牧民が家畜飼う際に使う道具類、武器などが置かれていたが、現在最も目立つ現象としては、オボーの上に紙幣や硬貨などが見かけることである。

現在、オトク地域において、牧民の一世帯が毎年数カ所のオボー祭祀に参加する現象が多くみられる。一つは、現在の住処に最も近いオボーの祭祀に参加し、祭祀の主宰者を担当することが多い；もう一つは、昔は父親が祀っていたオボーの祭祀に参加することである。勿論、オボーの場所により、上の世帯が住んでいた土地を推測し得るのだろう；また、地方において祭祀規模の最も大きいオボー祭祀に参加していることが観察されている。今後の研究において、オボー民俗の変容とオボーと祭祀集団との関わりに関して考察をより深めていきたい。

参考文献

- 『オトク前旗誌』編纂委員会 1995『オトク前旗誌』内モンゴル人民出版社
- 『オトク之窓』<http://www.eq.gov.cn>（参照日2012.2.10）
- 『オトク前旗之窓』<http://www.etkqq.gov.cn>（参照日2012.2.10）
- マッソル、ソルガムジ編 2011『オトク旗オボー―バヤン・ソンプル』遠方出版社
- ナランビリゲ 2011「モンゴル族のオボー祭祀にみる帰属意識」『年報 非文字資料研究』7号 神奈川大学常民文化研究所非文字資料研究センターpp.413-430.
- ソナム、アルビンバヤル 2005『オトクのオボー』内モンゴル大学出版社
- 楊海英1999「モンゴルにおける「白いスウルデ」の継承と祭祀」『国立民族学博物館研究報告 20号巻国立民族学博物館出版pp135-212.
- 楊海英2002「十九世紀モンゴル史における「回民反乱」―歴史の書き方と「生き方の歴史」の間―」『国立民族学博物館研究報告』26巻3号
- 楊海英2003『漢族がまつるモンゴルの聖地―内モンゴルにおける入植漢族の地盤強化策の一側面―』『民族の移動と文化の動態：中国周縁地域の歴史と現在』塚田誠之編 風響社
- 楊海英2004『モンゴルにおけるアラク（斑）・スウルデの祭祀について』、『チンギス・ハーン祭祀―試みとしての歴史人類学的再構成―』、風響社

註

¹ 旗・オボーとは、清代に内モンゴルで確立した行政単位の「旗」の名を冠した公的性格を持つオボーのことを指し、昔から主宰者は旗政府から派遣され、祭祀は主に旗の財政及び旗に所属する下の行政が支えて行われる。規模の大きいオボー祭祀が行われるため、全旗の人々が参加するのである。オトク地域では、このような旗・オボーは13基あり、チバガント・オボーのその中の一つである。

² このオボーの名は草が生えない土と言う意味で、現在祀っていないオボーである。(『オトク・オボー』82p)

³ 寧夏回族自治区の南部の固原市の西南

に位置し、昔のシルクロードの北へ通る道だった。歴史的に北方民族と中原民族の文化が接触する場所だった。

⁴ 「9」という数字は、モンゴル人にとって特別縁起の良い数字であり、歴史的にチンギス・ハーンは特に9という数字を好んだと言われている。

⁵ アンダイ舞踊は、明末清始のころに内モンゴルのホルチン草原の南部のフレイ旗で発した民族舞踊である。最初は、民間でシャマンが治療する際にとる動作やしぐさに起源を持ち、後に賑やかで楽しい雰囲気を作る民間の舞踊として発展したと言われている。

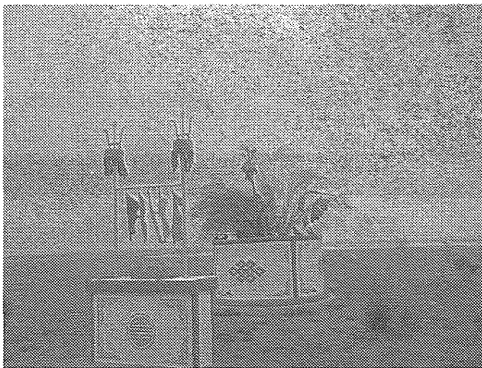


写真1 フテリン・オボー



写真2 チバガント・オボー

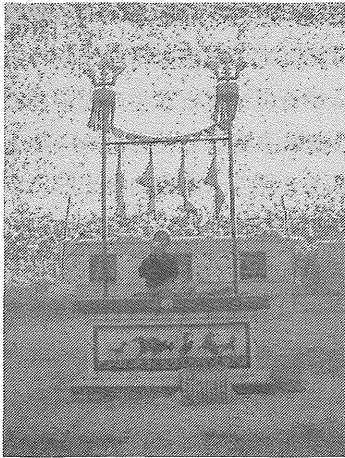


写真3 朝、家の前のスウリデを祀るバヤン・チョット氏



写真4 エルヘト・オボーの大オボー



写真5 エルヘト・オボーの十二基の仏塔らしき小オボー



写真6 オナガン・ブリド湖



写真7 シュルヘイ・オボー

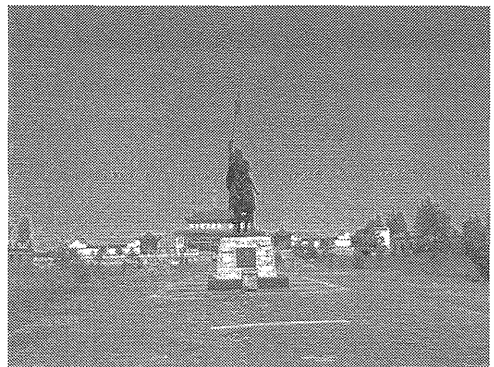


写真8 シュルヘイ寺の敷地内に立つチンギス・ハーンの銅像

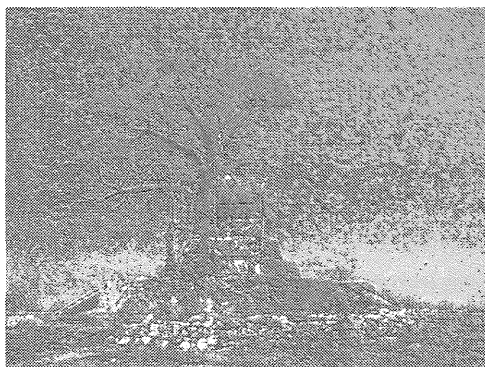


写真9 ジュルヒン・スム・オボー



写真10 仏様が宿る楡の木



写真11 チャガン・デゲキン・オボー

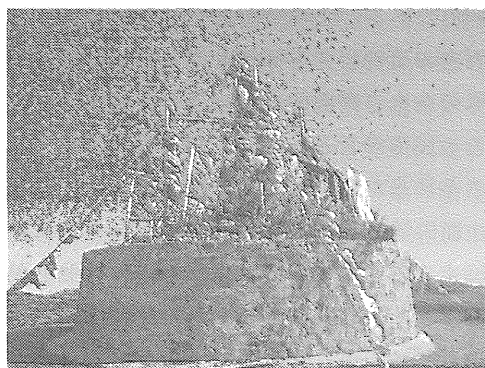


写真12 農耕村落のフンデイン・オボー